

今回の大震災において、使命感を持って福島原発に向かっていった人たちの事がニュースで取り上げられていました。この人たちは自分の“命” “いのち” を懸けて（使って）自分にしかできない事をしようとしていました。聖書を通してこの「いのち」について考えていきたいと思います。聖書は「いのち」と平仮名で表現しています。「命」ではありません。「いのち」とはヘブル語で「ハイブ」や「ネフシュ」が使われています。これは生命としての“命”とは違う意味です。この「いのち」の意味は複数形で書かれていて、“人が活気に溢れている” “いきいきとした、健康、幸福を伴う生命” として使われています。「あなたが、たましいに幸いを得ているようにすべての点でも幸いを得、また健康であるように祈ります。（Ⅲヨハネ：2）」 私たちには霊があるから魂（知情意）があります。この霊の部分、すなわち、いのちに活力があるから、魂や肉体においても幸いを得る事ができます。天地創造の時、人を形作った後、神は「いのち」の息を吹き込まれました。人には肉体的な命ではなく、神の息によって「いのち」あるものとして造られました。私たちが生き活きする時というには「この人生の中ですべき事を知った時」なのです。では今の私たちは活気に溢れ、いきいきとした生活をしているでしょうか。それとも何かに疲れを覚えている生活でしょうか。聖書には私たちはこの地上に生まれてくる前から、神による計画があると書かれています。この神の計画に従い、行動していく時にいのちからいきいきと活気に溢れるようになります。ですから私たちが何のために「いのち」を吹き込まれたのかを考える必要があります。私たちのする行動が良ければ周りに良い影響を与えます。クリスチャンである私たちは神の子どもとなりました。子どもは親を映す鏡です。私たちの行動は親である神を映しているようなものです。私たちが絶望していれば、神が絶望しているように見られてしまいます。私たちが生き活きしていないと神が生き活きしていないと思われてしまいます。私たちはいきいきしていないと疲れを感じますが、実は疲れているから、いきいきできなくなります。私たちが“いのち” をどのように使うのかによっていきいきできるのかに違いが出てきます。そしてその“いのち” をその人に合わせた使い方をすればいきいきする事ができます。クリスチャンである私たちは自分のために生きているではありません（ガラ2：20） 私たちの周りにいる人のために生きているのです。それぞれ違った働きはありますが、私たちのこの地上においての存在する理由はこれです。「自分のいのちを自分のものとした者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失った者は、それを自分のものとします。（マタイ10：39）」 私たちは自分のために「いのち」を使うと「いのち」を失うこととなります。しかし私たちは神に創造された意味を知り、自分の「いのち」をイエスキリストのために使う時にいきいきとした生活を送る事ができるようになります。時に人は肉体的には疲れを覚える事もあるかもしれませんが、ただ疲労している事とは全く違います。これは周りの人のために自分の“いのち” を使ったことなので、嫌な疲れではありません。本来、私たちの疲れといきいきはセットでなければなりません。自分の人生を自分のために使うと失ってしまいます。しかし自分のためではなく、周りにいる人々のために使うと得る事ができます。「こういうわけで、なすべき正しいことを知っていながら行わないなら、それはその人の罪です。（ヤコブ4：17）」とあります。私たちには神に託された使命がありそれを知っています。しかし、私たちに都合によって先延ばしにしたり、逃避したりしていることは罪であると聖書は書いています。私たちはどのように生きて、神に与えられた“いのち” を使ったらいいのでしょうか。聖書にサウル王が出てきます。（Ⅰサム15：7～31）ここではサウル王は自分のために記念碑を立てています。自分の功績を人々の前に現す事をしていました。このようにサウル王の目は自分に向けられていました。心の中心に自分があり、自分のために戦いに出ていました。そのためサウル王は神の命令に従いませんでした。預言者サムエルに罪を指摘されても自分を擁護するような発言をし、民に責任転嫁をしました。悔い改めるチャンスを逃してしまいました。故にサウル王は王位から退けられ、ダビデが次の王として神に召されていきました。反対にダビデやソロモンの生き方を見てみると、自分のためではなく、周りの人のために神に従って生きていました。ダビデやソロモンは国を治めていくために自分の力では足りない事が分かり、神の力を常に求めていました。良い時に良い事ができるのは当たり前です。しかし自分にとって都合が悪くなった時、真価が問われます。私たちがもそのような時にこそ、自分のために生きることをやめなくてははいけません。サウル王は失敗したときに、神のためにしていた事を忘れてしまっていたので悔い改める事ができませんでした。私たちが悪い時に責任転嫁するようなことを止めましょう。正しく生きていくためにはいつも神に知恵と啓示をもらいましょう。そのためには1日の中でゆっくりと聖書を読み、祈る時間を取りましょう。グッセマネの祈りの時間です。ここでいのちを使うための準備をしましょう。私たちにしかできない事があります。私たちに任されている人々があります。その人に対して責任を持たなければいけません。「神の賜物と召命とは変わることがありません。（ローマ11：29）」のように、私たちはどんな状況になったとしても、私たちの生き方は変わりません。私たちは神がしなさいといわれている事を神の知恵と力によって行うだけです。神の管となるだけです。私たちを通して神が顕されるようにしましょう。神の管となり、良いものが周りに流れた時に、私たちは忍耐や痛みを感じるかもしれませんが、私たちはいきいきする事ができます。私たちが与えられている“いのち” を誤って用いないために①**自分のものとしな**い（Ⅰテモテ6：7～12）「私たちは何一つこの世に持って来なかったし、また何一つ持って出ることでもできません。」自分のいのちは自分のものではありません。私たちは何一つもって生まれてきませんでした。そしていのちでさえ、イエスキリストによって買い戻されました。私たちはただそれを預かっているだけです。そうすれば疲れることもありません。私たちのいのちを自分のものだと思うとき、責任を感じて疲れてしまうのです。預かっているのであれば、説明書（聖書）に従って歩むだけです。誤って用いないため②**心を捕らわれるな、執着**。私たちはいのちが自分のものではなくなったと思う時、次にお金や物や地位に捕らわれて、他人と比較してしまいます。私たちの持っているものは、明日失ってしまっても良いと確信を持たなければいけません。私たちは神の管ですから、神から預かっているものを停滞させてはいけません。イエスキリストは神の位を捨ててこの地上に降りてきてくれました。そして十字架にかかる時は地上で得たすべてのものを失いました。私たちは自分の地位にも執着してはいけません。私たちは他人の前で恥をかかされる時にとっても嫌な気持ちになります。それはプライドが傷つけられるからです。私たちは自分のために生きることを止めましょう。③**高ぶりを捨てる**。3つのポイント全てで同じ事を言っています。私たちが今ここにあるのはすべて与えられているからです。一般的には私たちの周りにあるものの86%は与えられたものです。残りの14%は努力によって得たものであると言われています。このように私たちはあたかも自分で得たように考えて、行動していますが、実はそうではありません。神によって与えられたものです。しかし周りにいる人、環境によって態度が変わってしまうのは高ぶっている証拠です。私たちは考えなくてははいけません。大きな震災によって多くのいのちを一瞬で奪われてしまったこの時期、私たちは神に召された事をもう一度確認しましょう。私たちに召しと賜物は変わりません。クリスチャンであれば、生涯をかけていのちを使っていきましょう。ペテロはイエスに呼ばれた時、すべてを捨てて従っていきました。執着していませんでした。私たちが神に呼ばれた時に、すべてを捨ててもよい覚悟ですべき事をしていきましょう。私たちがどのように生きることを望んでいるのか、召命を確認しましょう。そして与えられたいのちを使って神の管となり、イエスキリストを現していきましょう。（要約者：平澤一浩）

